

夢団834新聞

VOL.01

FM83.4 メディアスエフエム 夢団へ未来へつなげる ONE TEAM

防災啓発活動には手づくりの語り部ボードが大活躍!

東日本大震災から15年



震災を知る最後の世代 未来へ繋ぐバトン

2026年3月、東日本大震災の発生から15年が経ちました。最大震度7を記録し、国内観測史上最大の津波が襲った未曾有の災害、被災地は今、どのような状態なのでしょう。ハード面の復興が進む中でも、人々の心にはあの日の出来事や情景が刻まれています。そんな中、震災の記憶を未来へと繋げるために活動を続ける方が大勢います。岩手県釜石市で出会ったのは、若き有志たちの姿でした。

およそ6年前に結成されたという、「夢団(ゆめだん)」。釜石市の高校生による防災・震災伝承活動グループです。震災発生当時の記憶はほとんどない彼らだからこそできる、教訓を学び次の世代へ「楽しく」伝えること、語り部活動をはじめ、ポリ袋を活用した防災食(ポリめし)の考案、遊びながら学べる防災ゲームの制作、動画を通じた発信など、夢団のメンバーたちは、今日も高校生ならではの視点で防災の輪を広げています。

旧・復興の様子を震災発生直後から伝えてきました。震災発生時には、エフエム岩手釜石支局「やっべしエフエム」と電話を繋いで最新情報を伝え、その後も釜石市の施設「いのちをつなぐ未来館」の語り部に関する特別番組や、被災者を受け入れた寺院の住職へのインタビュー、毎週月曜日の「姉妹都市情報」のコーナーなど、現在に至るまで、放送を通して釜石市の声を伝えて続けています。そんなメディアスエフエムは、この節目の年に、釜石市を訪れて取材を決行。現地では、夢団の皆さんとの交流をはじめ「いのちをつなぐ未来館」や、釜石東中学校の訪問、釜石市のラグビートーム「釜石シーウェイブス」の試合観戦とインタビューなどを行いました。

夢団について

釜石市の高校生たちによる防災・震災伝承活動グループ。現在の活動メンバーは、東日本大震災発生当時は0~3歳で、多くが震災の記憶や鮮明な実体験を持たない世代。そんな高校生たちが、新たな伝承のカタチに挑戦しています。語り部などの防災啓発活動をはじめ、防災食のレシピ考案や、かるたやすごろく、防主めぐりなどのオリジナルゲーム開発まで、その活動は多岐にわたります。

東海市と釜石市の関係

愛知県東海市と岩手県釜石市は、2007年に姉妹都市提携を結びました。1964年に釜石製鐵所から東海製鐵所へ多くの従業員が移り住んだのをきっかけに交流が始まり、釜石市のバレーボールチームが東海市を訪れた1984年のスポーツ交流を皮切りに交流を重ね、2006年に姉妹都市提携議案を議決。翌年釜石市で調印式が行われ、晴れて姉妹都市提携を結ぶに至りました。



[上] 夢団の高校生たちと一緒にどのような新聞にしようか話し合っている様子。[下] 語り部として活動している現場。高校生たちの熱意が伝わります。



岩手県初結成！ 学校単位の自主防災会

2025年2月、釜石東中学校は、災害発生時の初対応を行う自主防災会を立ち上げました。会の中心となるのは生徒会の皆さん。大震災発生時には母親のお腹の中にいたという彼らは「東日本大震災」をどのように捉えているのでしょうか。

親や周りの大人たちから聞かされる東日本大震災は、恐怖や不安の記憶が大半。しかし、彼らはそこに価値を見出しています。震災があったからこそ備えることができる。釜石東中学校では、火災や地震などの様々な状況を想定した避難訓練や、実際に津波のVRを見て津波の恐怖を体感するなど、日頃から防災意識を高める活動を行っています。また、「防災町歩き」をして、釜石の危険な場所などをしっかりと確認し、実際に起きてしまった時のための対策も行っているそうです。生徒会の皆さんは、震災を経験していない世代だからこそ、学び続けること、自分事として捉えてしっかりと考えることが大切だと話してくれました。

釜石東中学校

釜石市北部の陸中海岸国立公園の一角に位置する1974年創立の統合中学校。東日本大震災で壊滅的な被害を受け、甲子中学校・釜石中学校での間借り生活、5年に及ぶ仮設校舎での生活を経て、2017年4月から現在の校舎へ、「助けられる側」から「助ける側」になるべく、学校をあげて日頃から防災活動に積極的に取り組んでいます。

夢団サポーター紹介

●伊藤聡さん(三陸ひとつなぎ自然学校 代表) 釜石生まれ釜石育ち。東日本大震災時は、釜石の旅館「宝来館」勤務。波に追われるように逃げた裏山で九死に一生を得る。その後、防災についての学びを発信する事業など多くの事業を手掛け、現在は若者のチャレンジを応援する仕組みづくりを行う。



防災には漠然とした不安が付きまといりますが、過去としっかり向き合うことで「正しく恐れる」ことができるようになります。以前、夢団の活動に触れた学生が、「ここには悲しみではなく『希望』がある」と言ってくれました。これこそが、私が若い世代へバトンを渡す一番の理由です。夢団代表の森真心さんが「かつて被災地と呼ばれたこの地で生きる一人として」というフレーズを用いて語りました。被災地を「かつて」と呼ぶ世代に移り変わった今だからこそ、あの日を悲しみに終わらせず、次へ繋ぐことが重要だと感じています。夢団の活動を通じて、震災の経験や学びが世代や地域を超えて循環し、新たな防災の意識を生み出していくこと、それが夢団と共に目指したい未来です。

●常陸奈緒子さん(釜石まちづくり(株)/(一社)walavie 勤務) 釜石生まれ釜石育ち。青年海外協力隊として、アフリカで2年間務めた後、支援隊として復興まちづくりに従事。その頃に、高校生のプロジェクト伴走活動を開始。現在は、釜石まちづくり株式会社社に勤務しながら、夢団のサポートを行っている。



夢団の活動は、部活動や委員会のような学校の公式な活動ではなく、完全に有志の余暇の活動の中で取り組んでいます。部活動と両立し、助け合いながら実践してくれています。基本的には高校生が主体で活動し、私たち大人は少し背中を押す。やると決めたことを全力でサポートするよう心掛けています。高校生が主体的に「楽しく」防災に取り組んでいる姿を見ることが、少しでも防災について考えてもらえるきっかけになると嬉しいです。

Report

いのちをつなぐ未来館



震災の出来事や教訓とすべきことを伝えるとともに、災害から未来の命を守るための防災学習を推進する施設。東日本大震災の出来事や教訓、防災学習の取組みを紹介する展示室、書籍や資料、写真の閲覧ができる図書スペースなどを完備。無料ガイドや避難経路体験、語り部活動も行っています。

「メディアスエフエム」のVOICE

あの日のあの場にいた人たちの無言のメッセージ。展示の一つひとつが「釜石の皆さんからのメッセージ」だと感じました。津波到達時間まで止まった時計、砂まみれの法被、予定が立てられたままの2011年3月の黒板行事表。あの日、釜石にいた人たちの人生があり、穏やかな日常があったという事実を受け止めることに必死でした。

— 当たり前前に明日が来るわけではない、日常が過ぎることのありがたさ。釜石の皆さんからこの日受け取ったメッセージを、今後私たちが暮らす町の皆さんに伝えていきたいと強く思った体験でした。

【住所】釜石市鶴住居町4丁目901番2 【電話番号】0193-27-5666 【開館時間】9:30~17:30、冬季(11月~2月)9:30~17:00 【休館日】水曜日、年末年始 【入場料】無料



●釜石ラーメン

程よいコシのある「梅輪の縮れ麺」と「琥珀色に透き通った醤油味の淡麗スープ」が特徴の岩手県釜石市のご当地ラーメン。鉄鋼業と漁業で賑わった昭和30年頃は、店の周辺に製鉄所の社宅が多数あり、1杯30~50円のラーメンを家族みんなで食べるのが楽しみだったそう。さらには、古くから漁港が栄え、多少せつちがだが羽振りの良い漁師たちが闊歩していた繁華街では、この縮れ麺の「注文から待たせないラーメン」が知らず知らずのうちに浸透していったとか。現在、釜石ラーメンは、中華専門店や一般食堂、そば・うどん屋などで幅広く提供されていますが、麺・スープ・トッピングで各店舗ごとの美味しさを楽しめよう。

●ラグビー

2019年に開催されたラグビーワールドカップの東北唯一の開催都市だった釜石市。釜石市が「ラグビーのまち」として広く認知されたのは、新日本製鐵釜石製鐵所ラグビー部の存在に由来しています。ラグビーの日本一を決める「日本ラグビーフットボール選手権大会」において、7連覇という偉業を成し遂げ、その圧倒的な強さから「北の鉄人」と呼ばれました。現在は、地域型クラブチーム「釜石シーウェイブスRFC」として生まれ変わり、釜石ラグビーの伝統と誇りが受け継がれています。



ケーブルテレビの知多メディアネットワークが運営するコミュニティエフエムラジオ局。周波数は、FM83.4MHz。ケーブルテレビ会社直営のコミュニティエフエム局としては愛知県初。東海市の防災ラジオとして、2007年10月1日に開局し、2016年1月に知多市にもエリアを拡大。無料アプリでのインターネット放送も実施中!

QR code and text: 無料アプリのダウンロードはこちらから 今回取材した内容は右の二次元コードからお聴きいただけます